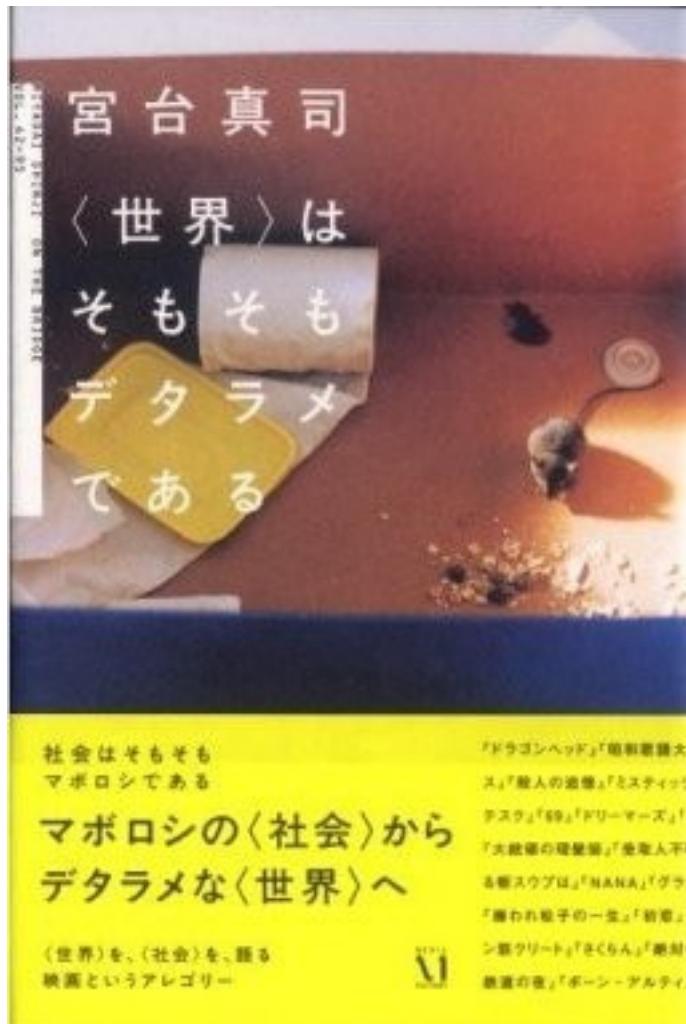


# 「世界」はそもそもデタラメである



[「世界」はそもそもデタラメである](#) [下载链接1](#)

著者:宮台 真司

出版者:メディアファクトリー

出版时间:2008

装帧:B6判

isbn:9784840126144

社会はそもそもマボロシである。

マボロシの「社会」からデタラメな「世界」へ。

「世界」を、「社会」を、語る映画というアレゴリー。

世界が変われば世界感覚も変わる。終末世界で主人公が絶叫する映画『ドラゴンヘッド』に、日常感覚を終末世界に持ち込む、という想像力の決定的欠如を見出す

「終わりなき日常」の停滞を抱えた平成の「クソ社会」が、終末を前にした途端に輝き出す、という面倒な事態を捉えた映画『昭和歌謡大全集』の敏感さを見出す

デジタル化によるダウンサイジングが「邦画の欠落」を際立たせるなかで、インディーズ映画『亀虫』『少年歌』に「世界」と「実存」とを見出す

映画『キル・ビル』と、映画『過去のない男』との決定的な違いに、昨今あふれる「頬楽的なレトロ」から、るべき「本來的なレトロ」への、脱出の突破口を見出す

「世界」の指し示しに成功した映画『IN THIS WORLD』と、「社会」へと閉ざされた映画『アンテナ』『きょうのできごと』との決定的な違いに意味を見出す

自らの限界を知る者同士の入れ替え不能な絆を描く映画『4人の食卓』に、自らの限界を知る者が、不可能と知りつつ不可能な夢を見る営みを見出す

押井守監督のアニメ映画『イノセンス』に、「ヒトではなくモノの入れ替え不能性」ならびに「精神ではなく身体の入れ替え不能性」という逆説的モチーフを見出す

「同じ夕日」を、主人公と、観客とが、それぞれ別様に体験する、という映画特有の表現の成功例を、『殺人の追憶』と『ミスティック・リバー』に見出す

「我ら」とは誰か。我らの「原罪」は贖われるのか。贖罪の可能性と不可能性を描いた映画『パッション』と『CASSERN』に原罪論の今日的な水脈を見出す〔ほか〕

作者紹介:

目录:

[「世界」はそもそもデタラメである 下載链接1](#)

标签

## 评论

[「世界」はそもそもデタラメである 下载链接1](#)

## 书评

[「世界」はそもそもデタラメである 下载链接1](#)